

『思い出にニスを塗れ』

〔原案〕

今ここにいないあの子の絵を描こう。

今ここにいないあの子呼び戻すために。

あの子はきつと綺麗だった。

あの子はもつと嫌な子だった。

思い出を美化してはいけない。

思い出は保存しなくてはいけない。

描き上がることのない肖像の前で、私たちは立ち尽くしたまま。

なくなってしまう絵画教室の片付けを通して描く、「あの子」と、それにまつわる私たちの話。

〔登場人物〕

酒井田 祥平・・・絵画教室を開いていた高齢の母を手伝っていた。

しかし絵のことはよくわからない。絵末子と交際していたが、絵末子の失踪後、ほどなくして真希と結婚。

板野(酒井田) 真希・・・絵画教室の生徒だったが、教室がなくなってからは

めっきり絵を描かなくなってしまった。
酒井田と結婚したが、そのことは絵画教室の誰にも話していない。

安藤 楓・・・酒井田の高校の同級生で、元美術部。

絵画教室がなくなってからも、育児の合間を縫って
少しずつ絵を描いている。

木内 実莉・・・美術大学の受験のために高校時代から絵画教室に通

っていたが、無事に合格し、晴れて今年から東京の美
大生となった。

絵末子・・・絵画教室の生徒だったが、ある出来事をきっかけに

絵画教室へ来なくなり、音信不通になってしまう。

「前提（作者より）」

耳鳴りのするような蝉時雨が響く、暑い夏。

酒井田の家の中にある、絵画教室として使われていた部屋。部屋の奥には倉庫があり、教室で描いた絵が保管されている。

酒井田の母は体調を崩し、絵画教室をやめたあと、この部屋で生活をしている。そのため、布団や扇風機、飲み物のペットボトルなどがそのまま放置されている。

田舎町ながら、かつてはそれなりに沢山の生徒を抱えたこの教室は、有名な画家こそ輩出しなかったものの、様々な世代の人に愛され、個性豊かな絵たちが生み出された。

一度描き始めた絵は、途中で間違ってしまったら、なんとか消すか、うまく修正してごまかすか、諦めて一から描き直すか。

人もまた途中で誤ってしまったら、それを消したりごまかしたり、諦めて人生ごと（それは生き死にも含めて）やり直すか。

とはいえ、見えないほどまで隠しても、その筆跡は必ず残ってしまう。

薄く残る、自らにしか見えない筆跡とともに、「あの子」のいた場所で生きるということ。

そんな絵画教室に残った人々の、絵、だけでは終わらないお片付け。

※この作品は、上演を前提としない演劇ユニット「関係舎」の辻本直樹氏

より、《作品タイトル》、《上記の原案》、《登場人物の簡単な設定》を

買い取り、そこから作品として創作を行なっています。

酒井田がだるそうに部屋へと入ってくる。

左手の薬指には結婚指輪をはめている。

少し部屋を見渡すと軽くため息をつき、扇風機をつける。

そのまま布団を畳み、片付けをはじめ。

少しして、板野も部屋へ入ってくる。

板野も同じく左手の薬指に指輪をはめている。

板野、部屋の中を見て、

板野 うわ、

酒井田 え？

板野 いや、ここで寝るって、お義母さん、

酒井田 いや俺も止めたんだけど、好きなものに囲まれてたいって言って、

板野 はあ・・・まあ、わからなくもないけど。

酒井田 え、あとどんくらいでみんな来る？

板野 まあ、あとちょっとあるけど。

酒井田 マジか、

玄関のチャイムが鳴る。

板野 え、はやっ。

酒井田 マジか。

板野 はい、(玄関の方へ行こうとする)

酒井田 真希、ごめんこれ、(板野へ。ペットボトルをいくつか渡して)

板野 は？

酒井田 中身、流してきてもらっていい？

板野 えー、とりあえず、通したらやるわ。

酒井田 すまん。

板野、ペットボトルを何本か抱え、玄関へ向かおうとし、

板野 あ、指輪、

酒井田 へ？

板野 指輪！取って！

酒井田 え、ああ。

酒井田、結婚指輪を外し、ポケットに入れる。

板野 あんた、そんなところ入れて失くさないでよね？

酒井田 大丈夫だつて。

再びチャイムが鳴る。

板野 あ、はい！

板野、ペットボトルを抱えて台所へ。

酒井田、急いで部屋を整える。

遠くで玄関の開く音、微かに外から聞こえる蝉の鳴き声。

玄関からは板野と安藤の声が聞こえる。

あー、お久しぶりですー。

ごめん、ちよっと早かった？

いやいや全然、わたしもさっき着いたところで。

よかった、いやあっついねえ・・・。

今年はずいいですねー、本当に。

板野と安藤、部屋へ入ってくる。

安藤、左手の薬指に指輪をはめている。

安藤 久しぶりー。

酒井田 おー。

安藤 お前、久しぶりに会って一言めが「おー」って、

酒井田 じゃなんだよ、安藤さん、お久しぶりですー。

安藤 きもつ。

酒井田 お前、一児の母になってその言葉遣いダメだろ。

安藤 いや関係ないし、ってかちゃんと娘の前ではお母さんしてますから。

板野 あれ、今おいくつになったんでしたっけ、えっと、

安藤 杏子？

板野 そう、杏子ちゃん。

安藤 いま2歳半、もー大変よ。

酒井田 はえーな、最初にここ連れてきた時、まだおっぱい飲んでたもんな。

板野 あ、そんなにすぐ連れてきてたんですか？

安藤 うち保育園入れてないから。ここくる時は旦那のお義母さんに預け

てただけど、一回ぎっくり腰でお義母さんがダメな時があつて、

酒井田 凄かったんですよ、授乳デッサン。

板野 授乳デッサン？

安藤 あー、

酒井田 おっぱいあげながらデッサンしてるの、器用すぎでしょ。

安藤 いやこつちも必死よ。さすがに首がすわるまではここお休みしてた

んだけど、もうね、家いるとストレス溜まっちゃって。

板野 大変ですね・・・。

安藤 最近はどうイヤイヤ期とトイトレで、もう家の中すんごいことにな
ってるから。

酒井田 トイトレ？

安藤 トイレトレーニング。

酒井田 脱おむつのな？

安藤 そうそう。もーさ、この前なんてちよつと目離した隙に・・・どこ

におしっこしたと思う？

板野 え、なんだろ、

安藤 筆洗うバケツの中！

酒井田 マジか！

安藤 器用すぎでしょ！あのサイズにピンポイントでおしっこ出来るんな

らもうお願いだからトイレでしてよって。

酒井田 器用なのは親に似たけど方向性が間違ってるな。

安藤 うっさいわ。

板野 それでも家で描いてるんですね、すごい。

安藤 もうね、意地。やめたら負けよ。昼寝の合間にちよつとずつでも描

かないと、一応まだコンクールにも出してるしね。

板野 はあ・・・。

安藤 はあ、って、なにそのリアクション。

板野 あ、ごめんなさい、いや純粹にすごいなって、

安藤 なにが？

板野 まだ、描いてるの。

安藤 いや描くでしょ、ここまですつと描いてたんだから・・・え、板野

ちゃんは？

板野 あ、最近はどう。ちよつと家族の体調が悪かったりとか、いろいろ？

安藤 あーね、あるよねえそういうタイミング。まあ、無理してやるもん

でもないし、良いんじゃない？やりたい時にやれば。

板野 はい、また余裕が出来たらいずれは・・・。

安藤 ・・・・あ、もうぼちぼち来るかな、

酒井田 実莉ちゃん？

安藤 うん、もう時間だよな？

酒井田 多分もうバス着いたんじゃないかな。

安藤 そっかあの子バスか、大変だ。

玄関のチャイムが鳴る。

安藤 ジャスト。

酒井田 開けてくるわ。

酒井田、玄関へ向かう。

安藤 ……じゃあ、なんかいい話ないの、

板野 え？

安藤 結婚、とか。

板野 ああ……。 (笑ってごまかす)

遠くで玄関の開く音、微かに外から聞こえる蝉の鳴き声。

玄関からは酒井田と木内の声が聞こえる。

酒井田 久しぶりー。

木内 お久しぶりです、お元気でしたか？

酒井田 まあぼちぼち、っていうか暑かったでしょ。

木内 いやすごいですね今年。こっち帰ってきたら蝉うるさー！って。

酒井田 いやいや蝉は毎年すごいから。もー、早速都会慣れしちゃったんじゃないの？

木内 いや絶対今年はすごいですって。

部屋へ酒井田と木内が近づくなか、

安藤 まあ、相手いるんじゃないけど、こんな田舎じゃ大変だからさあ、

相手探すのも。

板野 そう、ですね……。

安藤 でも、まだ働きたい時期か。え、職場は？

板野 仕事は順調です。

安藤 じゃなくて男。

板野 ああ、みんな既婚者です。

安藤 だよなあ、こっちはわりかし早いもんねえ。

酒井田と木内、部屋へと入ってくる。

安藤 久しぶりー！

木内 お久しぶりです！すみません、お待たせしちゃいましたか？

板野 ああ全然大丈夫。

安藤 わたし車だからちょっと早く来ちゃって。

板野 バス、ダイヤ変わったの大丈夫だった？

木内 そう、知らなかったんですよ、だからバス停で気づいて。

板野 ちようど実莉ちゃんが上京してすぐに本数が減っちゃって。

酒井田 運転手が足りないんだってさ、だから実莉ちゃん家の前走ってる路

線も、もしかしたら来年あたり無くなるかもって。

木内 えー、それは困る……。

安藤 だから早く免許取りなよ、大学生だと安いんだから。

板野 いや、わたしの運転とか絶対崖から落ちますよ。慣れればなんとかなるから。あのね、田舎の教習所の合宿とかいいらしいよ、仮免許かって即山道走るらしいから。

木内 即死じゃないですか！

板野 大丈夫だって、隣でプレーキ踏んでくれるから！

酒井田 その免許センター、夏休みとかに通えばいいじゃん、俺あそこで取ったよ。

安藤 わたしも。

酒井田 即山道だけだね。

木内 えー……。

板野 でも東京とかで取るより絶対楽だよ、そもそも走ってる車の量少ないし。

木内 確かに。

板野 わたしは東京いた頃にとっちゃったから、高速教習で首都高はねえ、死ぬよ。

木内 やっぱ死ぬ！

安藤 大丈夫だって！もー、大体の人はちゃんと免許取れてるんだから。

木内 はあ……。でも夏休みかあ、

安藤 やっぱ忙しいの、大学。

木内 そうですね、夏休みも講習あったり、課題で色々描かなきゃいけなかったりで。

安藤 そっかー。

木内 まあまだ一年なんで、そんなに大変じゃないですけどね。だから今日もこっち帰ってこれたんです。

安藤 なるほどね。

木内 なんか一応絵だけじゃなくて、学芸員の資格とかも取っておこうかなって。前に絵未子さんに勧められたんですよ。

一瞬、場が静まる。

板野 うん、いいと思うよ、大学いるうちに色々やっておいたほうがあと

あと楽だしね。

木内 あ、はい。

4人の揃った部屋の中に、静かにゆっくりと、まるで気配のないような絵未子が入ってくる。

絵未子もまた、左手の薬指に指輪をはめている。

誰も絵未子に気づく様子はなく、そのまま部屋のソファアへ座る。

酒井田 あー、じゃあ、そろそろ、本題のほうに……、

安藤 確かに、わたしも杏子預けてきてるから、あんまり長居できないし。

酒井田、立ち上がった改めて向き直り、

酒井田 と、いうことで、改めまして、この度はお忙しい中お集まりいただきありがとうございます。

改まってるな。

酒井田 うっさいわ。えー、皆さんご存知の通り、教室を閉めてしばらくしてから、母の妙子が入院いたしました。で、あんまり病状が芳しく

ないんですね。なので、お見舞いも、それこそ安藤とか来てくれようとしたけど、ごめんね、あの時は。なんとというかまあ、俺も不思議なもんだなと思ったんですけど、入院してちよつとしたら急にボ

ケが、ちゃんと言うと認知症になってしまっ

て……え、それは、あの答えられなかったら答えられない、で大丈夫

なんですけど、どのくらいっていうか……。

酒井田 ああ、どのくらい、んー……まあ、俺の顔見て爺ちゃんの名前呼ぶくらい？

酒井田 ああ、どのくらい、んー……まあ、俺の顔見て爺ちゃんの名前呼ぶくらい？

安藤 え、そんなだったの？

酒井田 そう、だから会わせられなくて。特にお前なんかは一番長く通ってたから、会ったらショックだろうなと思って。

安藤 いや、まあそれは、しょうがないことだから。

酒井田 えー、で、この家自体もだいぶ古いですし、もう丸ごと引き払っちゃうことにしようかなと思ってます。ただ、残った絵だけはさすがに勝手に捨てるわけにはいかないと思って、皆さんにお集まりいただいたというわけです。

安藤 と、いうことで、ここから過去の目も背けなくなるような絵の数々が登場するわけです。

木内 やだあー。

板野 え、でもわたしが入る前のかも見られるんですよ、ちよつと楽しみ。

木内 いやいやいやいや、もう振り返っちゃいけない過去がたくさんあるんですって。

板野 実莉ちゃん上手いのに、

木内 板野さん、誰でも最初は赤ちゃんだったんですよ？

板野 あ、うん、そうだね。

酒井田 じゃあ、そんなに時間もないし、早速やりましょうか、ね？

安藤 え、じゃあどうしよ、

酒井田 あ、俺が倉庫からどんどん出してくから、欲しいやつは各々確保してもらって、こっちで捨てちゃっていいやつは、なんか壁にでも寄せてわかるようにしておいて。

安藤 おっけー。

酒井田、倉庫の中に入って、どんどん絵を出し始める。

倉庫の外にいる人たち、それを受け取っては眺め、

安藤 これ、実莉ちゃんの教室デビュー作じゃない？

板野 え！

木内 え、いきなりですか？！

3人、ちいさな絵を覗き込む。

木内 うっわ、最悪。

板野 え、これいくつの時？

木内 高一の時に入ったんで、ちょうど15歳、ですかね。

板野 若っ、

安藤 流石に「来週から高校生来るから」って言われた時は結構びっくりしたよ。ここ最初はおばさんばかりで、わたしが最年少だったの。

板野 安藤さんいくつで入ったんですか？

安藤 わたし、高校卒業してすぐ。なんか、酒井田のお母さんがうちの高校の文化祭に来てて。酒井田がバスケットでダンスみたいなやつやっていうから。

木内 ダンスみたいなのってなんですか、ダンスみたいなのって。

安藤 なんか、みたいなの、だった。

木内 謎深まる。

安藤 (倉庫の中の酒井田に) 酒井田、ダンスみたいなのだったよねえ、え？

酒井田 文化祭のバスケット部の出し物。

安藤 (倉庫から顔を出し) ああ、ダンス？

木内 え、やっぱりダンスだったんですか？

安藤 いや、ダンスみたいなの。

酒井田 いやダンスだよ。

木内 え、

安藤 実莉ちゃん騙されちゃだめ。

酒井田 どう考えてもあれはちゃんとダンスだったろ！

安藤 じゃあやつてみなさいよ。

酒井田 え、こ、こういう・・・、

酒井田、ダンスみたいな動きをする。

一同、それをじっと見つめる。

木内 ……みたいなの、ですね。

酒井田 ちよ、えー？

板野 いまどきの若者の感性がそう言うんだから間違いない。

安藤 だよねえ！

酒井田 いや俺らはあの時、真剣にダンスを踊った。

安藤 まあ、こういうのがあって、

酒井田 え、なに俺、踊り損？

安藤 作業さいかい。

酒井田 はいはい・・・。

酒井田、しぶしぶ倉庫の中へ戻っていく。

安藤 あ、でね、なんだっけ、

板野 酒井田先生が高校の文化祭に来てて、

安藤 そうそう、でね、たまたま美術部の展示を見にきてくれたの。それで、声かけられて。

木内 へえ・・・。

安藤 当時はクロッキーばかりやって、展示もクロッキーしか出さなかったのよ。で、「あなた、色塗りに興味はないの？」って。

板野 色塗り(笑)。

安藤 そう、で、色塗りに来たの。

木内 でもクロッキーばかりやってたから、デッサンうまいんですね。

安藤 でも最初の頃はね、デッサン終わるじゃない、そうするともう、こんな感じ。(おもむろに天を仰ぐ)

木内 完全に飛んでますね。

安藤 入ってすぐ気づいたんだけど、わたし色彩感覚がゴミのように悪かったの。

木内 うあ・・・今なんかわたしにもグサって、

板野 いやいや、これとか全然うまいじゃん、(木内の絵を見て)これで15歳でしょ？

木内 いやもう見ちゃダメです。(絵を奪う)

板野 なんでー！

木内 廃棄でーす。

木内、自分の絵を廃棄する絵のところに立てかける。

安藤 でも本当に、実莉ちゃんは真面目だから毎回酒井田先生の言うことよく聞いて、

木内 いや、だって、さっきのあれから美大受験に辿り着かなきゃいけないわけですよ？そりゃ必死ですって。だって、美大いく人って美大専用の予備校とか行ったりするわけじゃないですか。でも、わたしにはこしが無かったし、ただ絵描くの好きならちくりんの山奥の中学生が「美大に行きたい！」って、今思えばずいぶん恐ろしいことを思ったなって。

板野 でもちゃんと入れたじゃん、ねえ？

安藤 うん。

木内 まー、だいぶギリギリでしたけどね。

酒井田 (倉庫の中から) うっわ！

安藤 どうした。

酒井田 見てこれ、(酒井田、絵を見せる)

安藤 うわでた！

板野 (笑)。

木内 Nintendo Switchー

酒井田 を、やる俺の絵な。Nintendo Switchメインじゃないから。

安藤 でもそのSwitch無かつたらこの絵描けなかつたから、本当Switch
さまさまだよ。

板野 たしかに、だって全然じっとしてくれなかつたですもんね。

酒井田 いや、だって俺モデルやったことなかつたし、っていうかいきなり
座らされて「はいやって」って言われても何したらいいのかわかん
ないし、

安藤 いや何もしなくていいんだよ、それが仕事だよ。

酒井田 だからまあ、Switchを握らせてもらったことでもいい動きも制限さ
れてね、

木内 いやいや、勝った瞬間拳掲げましたからね。

板野 もうちょっと落ち着いたゲームにしてくればよかつたのに。

酒井田 スマブラだったからな。

安藤 え、これすごい、

木内 安藤さんなんでまた私の・・・、

安藤 すごくない？酒井田一切無しでSwitchだけめっちゃ精密に描いて
あるよこれ。

酒井田 は？

木内 いや、わたしその日初めてNintendo Switchなるものを見て、酒井
田さんよりそっちに興味が湧いちゃって・・・。

酒井田 おい。

木内 だってなんかカラフルで可愛いし。

酒井田 俺が可愛いみたいなの、

安藤 え、可愛いと思ってたの？

酒井田 思っただけ！もー、え、これは？どうする？

木内 あ、わたし廃棄で大丈夫です。

酒井田 嘘でしょ・・・。

木内 その節はお世話になりました。

安藤 Switchにね。

酒井田 俺にな！

酒井田、再び絵を運び始める。

安藤、受け取った絵を見て、

安藤 あれ、これ知らない、

板野 あ、それ、

安藤 こんな課題やったっけ？

板野 絵末子さんとわたしが、旅行に行った時の・・・。

安藤 え、あ、ああ、なんか行ったって言ってたよね二人で、

板野 尾瀬まで水芭蕉を見に行って、その時のです。

安藤 絵末子ちゃんは何描かせても上手いんだから参っちゃうな！。

木内 すごい、綺麗・・・。

安藤 ま、このあとしばらくして、急に彼女はいなくなってしまうのです
が。

一同、沈黙。

安藤 つたく、さんざん先生に可愛がってもらってたのに、礼のひとつぐらい言っていきなさいよって、ねえ。

板野 まあ、絵末子さんにもなにか事情が、

安藤 礼儀つてもんがあるでしょ、礼儀つてもんが。

板野 ……

安藤 この絵は？どうする？

板野 ああ、(別の額縁を指差し)そっちの自分のやつだけ持って帰ります。

安藤 はいよ。

安藤、絵末子の書いた水芭蕉の絵を廃棄のところに置く。

板野、自分で描いた水芭蕉の絵を引き取る。

酒井田、倉庫から顔を出し、

酒井田 まあ、

安藤 あ？

酒井田 なんだよ機嫌悪そうに、

安藤 悪くないわよ、で？

酒井田 いや、絵末子の…、

一同、酒井田の差し出した絵を覗き込む。

木内 あ、絵末子さんにモデルやってもらったやつ…

酒井田 ほれ、全員分ある。

板野 うわあ、懐かしい、

酒井田 そしてなんと、俺が描いたのもあります。

安藤 は？あー！

木内 うわすっごい、

安藤 あんた、なんでもかんでも芸術は爆発させときゃいいと思ったら大間違いだからね。

酒井田 いや爆発してねえし、結構ちゃんと描いたのよ？

板野 まあ、あの時は先生にいきなり「あんたもたまには描いたら？」って言われたんですもんね。

酒井田 そうそう、いやたまにはどころかほとんど描いたことないっつーのにいきなり肖像画とか、そりゃ爆発するって。

木内 やっぱ爆発してるんじゃないですか。

酒井田 いや、脳内がね、もうパニックっていうか。

安藤 もうそういう作品として胸張つとけ、つてか描き直せないんだから。

酒井田 絵末子いたら「もう一回！」ってお願いするんだけどなあ、

安藤 いやいやないし絵末子ちゃん、っていうかあんた懲りないね、また描くの？

酒井田 え、だめ？

安藤 いや、ダメじゃないけど、

酒井田 だって、何か悪いし、絵末子に。

安藤 こんな絵じゃ？

酒井田 こんな絵って言うなよ。

板野 まあでも、描いちゃったものは描いちゃったものだから、ねえ。

木内 あ、はい。

板野 でも、懐かしいなあ、これ。

木内 当たり前ですけど、やっぱり同じ人をモデルにしても、みんな出来

上がりは全然違いますね。

安藤 そりゃそうよ、だってみんな見てるもの違うんだから。

木内 え？

安藤 実莉ちゃん！さっきのNintendo Switch！あのとき酒井田見た？

木内 いいえ？

安藤 そういうこと！

酒井田 俺いま再びデイスられた？

木内 いえデイスってません、ただ酒井田さんより Smiths に興味があっただけで、

安藤 だからそれでいいんだって、みんな人それぞれ気になる事は違うんだから。

安藤、絵未子の肖像画をゆっくりと掲げる。

絵未子、まるでさつきからそこにいたかのように、話し始める。

以下、回想。

絵未子 運よくお昼寝してくれるとは限らないじゃないですか、

安藤 いやそうだけど、

絵未子 まだ1歳の子にじっとしてて、なんてかわいそうじゃないですか？

安藤 でも酒井田先生だって良いって言って下さったんだし、

絵未子 杏子ちゃんが良いとは言っていないじゃないですか。

安藤 だって良いも悪いもまだわかる歳じゃないし、

絵未子 だからかわいそうだって言ってるんです、これが杏子ちゃんが喜んでやってくれるなら話は全然違うと思いますけどね？

安藤 え、そんなにうちの杏子をモデルにするの、文句あるの？

絵未子 違います、文句とかじゃなくて、

安藤 だってさつきから否定的なことしか言わないじゃない。

絵未子 否定はしてません、

安藤 じゃあ何？

絵未子 ご自宅でやられたらどうですか？

安藤 は？

絵未子 自分の家でやったらいいじゃないですか、その方が杏子ちゃんだって安心できると思うし、泣いちゃったりしても自分のペースであやしながら描けるし。

安藤 でも、赤ちゃん描ける機会なんてなかなか無いでしょ？

絵未子 それはもちろんそう思いますし、わたしだって描きたいって思ってます。

安藤 じゃあいいじゃない、なんでそんなさつきから、

絵未子 みんな安藤さんみたいにさつきとデッサン出来るわけじゃないんです。もし杏子ちゃんがぐずったりしちやったら、みんななかなか描き終わらなくて、それこそ1回じゃ終わらなくなっちゃいますよ？

そうしたら次の週も杏子ちゃん連れて来て、また同じ格好させて座らせるんですか？

安藤 ……

絵未子 だから、おむつ替えもご飯も好きな時にできる、ご自宅でやったらいかがですかって言ってるんです。わたしは描きたいですけど、わたしたちの為に杏子ちゃんが無理しなきゃいけないのは違うと思いますよ。

安藤 杏子連れてきたらかわいいかいい言うくせに。

絵未子 そりや言いますよ、だってかわいいじゃないですか！

安藤 じゃあなんで、

絵未子 だからそれとこれとは話が別だって言ってるんですよ、え、わたしが言ってること伝わってますか？

安藤 伝わってるけど…、

絵未子 安藤さんは、杏子ちゃんの絵が描きたいんですよ？

安藤 ……

絵未子 ただそれだけですよね、じゃあ家で、

安藤 家は家でねえ、やる事たくさんあんのよ、あんたは独身だからわか

んないでしょうけどねえ、家で悠長に絵なんて描いてる暇無いの！

絵未子 教室を、私利私欲のために使わないでください。

安藤 ……どっちのセリフだよ。

絵未子 え？

安藤 あんたが酒井田と付き合ってるの、みんな知ってるんだから。

絵未子 ああ、別に隠すつもりも無いですし。

安藤 じゃああんただって私利私欲でこの教室使ってるじゃない。

絵未子 え、それは話が全然違います、わたしはここに絵を描きに来てるんです。

安藤 で、ついでに男も作って、

絵未子 安藤さん…嫉妬ですか？

安藤 ……は？

絵未子 ご自覚がないのなら大丈夫です、この話はもう終わりにしましょう。
杏子ちゃんのこと、もう何も言わないので好きになさってください。

回想が終わり、

安藤 ごめん、ちょっとトイレ行ってくるわ。

板野 あ、いつてらっしゃい…。

木内 ……(板野に向かって)安藤さん、なんか急に機嫌悪くなりました？

回想。

絵未子 そういう人だから、いいよ放っておけば。

木内 え、わたしなんかしちやいましたかね、

絵未子 してないしてない、大丈夫。

木内 よかった…。

絵未子 いろんな人がいるだけだから、いいのいいの。もー、実莉ちゃん高校生なのに気遣いすぎだつて！

木内 いやだつて、わたし以外大人の人しかいないし…、

絵未子 だからといって別にあなたがそれにあわせて大人になる必要、ある？

木内 んー…。

絵未子 わたしは無いと思うけど。っていうか大人は別になりたくてなるものじゃないし、なりたくたつてなれない人もいるし、見た目は大人でも中身は子どもみたいな人だっているんだし。いま焦ってもいずれ勝手に大人になつてるから、いまは高校生を謳歌しときな、じゃないとあとで後悔するよ。

木内 え、絵未子さんは、後悔してることとありますか？

絵未子 後悔？後悔かあ、うーん…。

木内 ああ、ごめんなさい、

絵未子 え？

木内 悩ませちゃったから。

絵未子 ああ、あはは、そんなことで謝らないでよ、もー。しかも別に悩んでないし、ただ考えただけ。

木内 はあ、

絵未子 しかも考えるのって面白いし。

木内 え、そうですか？

絵未子 わたしはね、好きだけど。

木内 わたしは、うーん、ちょっと苦手です。

絵未子 まあ、悩み事と考え事が混在しちやつてるんだな、きつと。

木内 それは、どういうことですか…？ごめんなさい、わたし頭悪いからあんまり、

絵未子 悪くないでしょー！

木内 いやいやいや、

絵未子 じゃあ誰かに「お前はバカだ」とか言われたの？

木内 そういうわけじゃないですけど、

絵未子 じゃあ、実莉ちゃんの中開いてみないと、頭悪いかなんてわからない。

木内 ……でも、親に、もう少し真面目にしてろ、ちゃんとしてくれ、みたいに言われます、最近。

絵未子 え、実莉ちゃんこれ以上真面目でちゃんとしたふうになったら、もうただのガリ勉高校生になっちゃうじゃん。

木内 いや、そう見えて欲しいんです、うちの親は。怖がりだから。

絵未子 怖がり？

木内 わたしの家の周り、本当に集落みたいな小ささなんです。で、毎週わたしがバスに乗って町まで下りてるのを、周りの人たちに噂されて、「木内さん家の子は不良になったんじゃないか」って。もちろん、うちの親は「娘は東京の大学へ行くために勉強に行ってるんだ」って言うてるんですけど、「東京なんて」「高校出たら働け」って散々周りから言われちゃって、もう親もイライラしてるみたいなんです。

絵未子 いつの時代の話だよ、ってねえ。

木内 ……。

絵未子 でもご両親は大学行かせてくれるんでしょ？

木内 はい、父も母も大学には行ってたので。特に母は大学出たあと東京で働いてましたから。

絵未子 あ、じゃあこっちに帰ってきた人？

木内 いや、お見合い、だったみたいで……。

絵未子 へえ、このご時世に珍しいねえ。

木内 でも半ば強引に父と祖父が連れてきちゃったみたいなどころもある

みたいで、だから東京への未練がちよつと、あるみたいです。

絵未子 あー、さっきの後悔の話！

木内 あ、はい、

絵未子 わたしも実莉ちゃんのお母さんと同じような感じかも。仕事に未練があつて、本当は東京でもっと頑張りたいんだけどね。

木内 あの、どうしてこっちに帰ってきたんですか？

絵未子 ああ、過労で身体壊しちゃって。

木内 それは、ブラック企業……、

絵未子 とも違うんだけど、うーん、わたしに実力とか実績とか資格とか、そういうのがもう少しあれば良かったんだよね、多分だけ。あ、だから実莉ちゃん、大学いるうちに、絵はもちろんだけど、それ以外にもいろいろ資格とか頑張っておくといいわ。

木内 資格、ですか？

絵未子 そう、美大だったら学芸員とか取れるし、あれあるだけでずいぶん違うよ。

木内 学芸員……、

絵未子 まあ、今から考えなくてもいいから、入ってるいろいろ見て決めな、ね？

木内 はい……。

絵未子 もちろん絵はいっぱい描くだろうけど、でも結局はいろんなこと知ってないと、それこそ「高校出たら働け」っていう人たちに飲み込まれちゃうからさ。

木内 ……嫌です。

絵未子 じゃあ、とにかく生き残らねば、そのために勉強せねば、ね？

木内 はい。

絵未子 こんなところ、よっぽどの理由でもない限り、戻ってこなくていい

のよ。

回想が終わる。

安藤、トイレから戻ってきて、

安藤 なに、あのポカリ。

板野 あ、

酒井田 あ、なんか母の飲み残しで、

安藤 台所の横通ったらいっぱい置いてあるから、もー、びっくりしちゃうた。

酒井田 あとで片付けるから、そのままにしといて。

安藤 ……で、絵、あとどんくらい？

酒井田 ああ、(倉庫の中を指して)あとちょっと。

安藤 (倉庫を覗き込み)なんだ、意外と少ない……、

酒井田・安藤 授乳デッサン！

木内 授乳デッサン？

板野 なんか、あつたんだった。

酒井田 (絵を持って)いやこれですよ、

木内 ああ！あの時の！

安藤 違った意味で緊張感あったから結構いい出来だわ。

木内 わたしその日初めて授乳なるものを見て、たしか授乳する安藤さんの絵を描いてしまった気が……、

酒井田 そしてその絵がドン！(木内の絵を出す)

木内 ああ……。

板野 おー、上手いじゃん！

安藤 え、これ嬉しいんだけど、実莉ちゃん持って帰る？

木内 いや……、

安藤 じゃあ、わたしにこれくれない？

木内 いやいやいや、

安藤 子供と一緒にいる絵なんてなかなか描いてもらえないんだから、え、ダメ？

木内 ダメじゃないですけど、え、いいんですかこんな、

安藤 なーにがこんなよ、ほれ、実物の3割増くらい美人に描いてくれるじゃない。

酒井田 いや五割二分二厘だな。

安藤 黙っとれ。(木内に)え、ダメ？

木内 いや、どうぞ、そんなに喜んでくださるなら嬉しいです。

安藤 ありがとー。

酒井田 あとはほぼ母さんのと、昔いたおばさん達のだから、これでおしまいかな。

安藤 おつかれさまでーす。

酒井田 実莉ちゃん、帰りもバス？

木内 あ、はい、そのつもりですけど。

安藤 ああ、乗っていきなよ、うちの車。

木内 いやいや、結構遠いですから、

安藤 バス停で待つてるだけで干上がっちゃうよ？乗りな乗りな。

木内 ああ、ありがとうございます。

安藤 板野ちゃんは？

板野 あ、わたし、ちょっと梱包とか手伝うことになってて。

安藤 あらそう。(木内に)じゃ、行こっか。

木内 あ、はい。

安藤 じゃあまたー。

木内 ありがとうございます。

板野 お疲れ様です。

酒井田 俺、ついでにタバコ吸ってきますわ。

安藤、木内、酒井田、玄関を出て行く。

板野、先ほど見つけた絵未子の肖像画を手取る。

板野 はあ……。

回想。

絵未子 真希ちゃんごめんねー、結構運転させちゃった。

板野 ああ全然、高速だから一本道だし。

絵未子 にしても、行きも帰りも道空いてるし、いやあ、いい旅だなあ。

板野 もー、この人昨日から「いい旅だなあ」しか言わないんだけど。

絵未子 あはは、でも実際のいい旅だったじゃん！

板野 そりゃそうなんだけども！

絵未子 それにわたし、楽しかったことか思い出すだけでしばらくはやっていけるんだよね。

板野 あー……それ、羨ましいかも。

絵未子 できない人？

板野 なんか、楽しいことがあったってことは思い出せるし、その時楽しかったのかも覚えてるんだけど、こう、いざっていうときに悲しいのほうに勝っちゃって、みんなこう、ポロポロ負けてっちゃう、みたいな……。

絵未子 思い出の敗北？

板野 うん、そうねえ。まあ、敗北とか勝手にいっちゃうのも、思い出に對して可哀想な気持ちになるけど。

絵未子 別に思い出は泣きも笑いもしないから。

板野 いや、そうなんだけども。

絵未子 思い出思い。

板野 思い出思いってなにそれ。

絵未子 いや、ずいぶん大事にしてるから、思い出。

板野 大事な時には負けてっちゃうのにな？

絵未子 それは思い出のせいじゃない、現実が強すぎるだけ。

板野 現実が、強いでしょ……。

絵未子 まあね……。

板野 ……。

絵未子 じゃあさ、そこら中に飾っておけば？

板野 え？

絵未子 思い出！

板野 ああ。

絵未子 しかもうちらは何しにこんな遠出したんだっけ？

板野 水芭蕉を描きに、ちよっと尾瀬まで。

絵未子 だから、今日描いたのも家に飾ったときな、戻ったらちゃんと色塗って。

板野 うん。

絵未子 そうすれば、こうRPGで装備増やして防御力あげるみたいになさ、

なるんじゃない？

板野 なるほどね。

絵未子 わかんないけど。

板野 わかんないじゃん。

絵未子 だって、あとは真希ちゃん次第でしょ。

板野 うん……。あ、ねえ、一個、頼みたいことがあるんだけど。

絵未子 ん？

板野 あの……。わたしの絵を、描いて欲しい。

絵未子 (笑)。どうしたの急にそんな神妙に。

板野 いや別に神妙とかじゃないんだけど、前からちよつと思つて。ほら、教室のモデルだと着る服とかポーズも指定だったりとかするじゃん。そうじゃなくて、一番お気に入りの服で、好きな場所で描いて欲しいの、絵未子に。

絵未子 ああ、いいねえ！

板野 本当に？

絵未子 うん、いいよ、やろう。

板野 やった！

絵未子 じゃあそれ、描いたら玄関に飾つてね。

板野 玄関？

絵未子 一番防御力強そうだから、毎日それ見て家出なよ。

板野 魔除けじゃないんだから、もー。

二人 (笑)。

回想が終わる。

酒井田、外から帰ってくる。

板野、指輪をはめ、

板野 (酒井田に向かって) 指輪、

酒井田 ああ、

酒井田、指輪をはめる。

板野 はあ、疲れちゃった。

酒井田 いや、そんな動いてないでしょ。

板野 気疲れ。安藤さんに「いい話ないの？結婚とか」って、もーほつと

いてよ。

酒井田 まあ、そういうやつだから。

板野 こちらはこちらでなんとかやってますから、ね。

酒井田 ああ、うん。

板野 あ、ポカリ。

酒井田 ああ、あ、ついでにいらないやつ、庭に出しておいてくれない？

板野 え、それわたしやるの、

酒井田 俺もあとでやるから。

板野 えー・・・しようがないなあ。

酒井田 重いからちよつとずつね。

板野 はーい。

板野、なんとなく鼻歌を歌いながら、木の枠をいくつか選別し、外へ運び出しに行く。

酒井田、脇に置いていた絵未子の肖像画を手取る。

回想。

絵未子 猫・・・？

酒井田 いや、犬・・・、

絵未子 猫。

酒井田 いや犬。

絵未子 んー！

酒井田 いや猫も可愛いと思うんだよ、

絵未子 じゃあ猫でいいじゃん。

酒井田 でも犬はさ、懐くから。

絵未子 そもそもわたし犬苦手なんだって。

酒井田 飼ったら大丈夫になるって。

絵未子 しかも散歩行かなきゃいけないじゃん。

酒井田 じゃあ、散歩は俺やるから。

絵未子 絶対怪しい。

酒井田 え？

絵未子 飼って2ヶ月目からはわたしに散歩してるの想像つくもん。

酒井田 いや、絶対やるから、ね？

絵未子 っていうか、最初は猫でも犬でもなかったじゃん、わたしデグー飼

いたって言ったじゃん。

酒井田 え、なんだっけ、デグーって。

絵未子 この前ホームセンターで一緒に見たじゃん、ってか見せたじゃん、

これデグーって言うてすごい頭いいネズミなんだよって。

酒井田 そうだっけ。

絵未子 ……まあ、良いけど。もう慣れた、祥平がわたしの話聞いてないのとか。

酒井田 いや聞いてるよ？

絵未子 どのくらい？

酒井田 半分くらい？

絵未子 半分！半分か…。

酒井田 いや、さすがにもうちよつと聞いてるよ？

絵未子 半分とちよつとね。残りの半分くらいはどーこ行っちゃってるんでしようねー。

酒井田 いやでもね、その時は聞き流してたことも、たまにふって思い出したりするんだよ、え、これ面白いでしょ。

絵未子 あとから思い出すんじゃないかって、その時に聞いてほしいから話してるんだけど…。

酒井田 ……ごめん。

絵未子 いいよ、慣れたから。

酒井田 で、そもそもなんで犬か猫かの二択になったんだっけ。

絵未子 もー早速！あの、寿命が長い方がいいんじゃないってことになったじゃん、この前。

酒井田 あー、そうだ。で、無難だけど犬か猫だよなってなったんだわ、思

い出しましたー。

絵未子 えらーい…。でもさ、寿命だけでペット決めちゃうのってどう

なの？

酒井田 え、だって、長生きしてくれたほうがずっと一緒にいられるじゃん。

絵未子 それはこっちの都合じゃん。

酒井田 え、ペット選びってそういうもんでしょ。

絵未子 そもそも、生き物が長生きであることって、そんなに大事かね。

酒井田 いや大事でしょ、

絵未子 どうして？

酒井田 どうしてって、え？長く生きれた方が良くない？

絵未子 答えになってません。

酒井田 じゃあなに、

絵未子 なぜ、長く生きることが美德とされているのでしょうかね、この世

の中では。

酒井田 え？うーん…。

絵未子 死ぬのが怖いから？

酒井田 俺は怖い。

絵未子 わたしは、怖くないんだよね。

酒井田 ……。

絵未子 そう、もうずっと、怖くないの。なんでだろ。

回想が終わる。

板野、帰ったはずの木内を連れて部屋へ入ってくる。

酒井田 え、どうしたの、

木内 あの、やっぱり欲しい絵があって、安藤さんをお願いして戻ってきました。

酒井田 お、Switch。

木内 いや、絵未子さんが描いた水芭蕉の絵を、いいですか？

酒井田 ああ、廃棄だっけ、

板野 うん、えっと、(廃棄の絵の中から水芭蕉の絵を取り出し)これ？

木内 はい。

板野、絵未子の絵を木内に渡す。

木内、板野の手元をじつと見て、

木内 ……指輪、

板野 え？

木内、さらに酒井田の手元にも目をやり、

木内 指輪。

酒井田 ……。

木内 おかしいと思ってたんです、車がいつもより一台少ないって。板野さんの車無いなって。

酒井田 ああ、俺が、迎えに行ったから…。

木内 ……あの、絵未子さんがどこ行っちゃったか、わたし知ってるんです。

板野 えっ、

木内 わたし宛に遺書が届いて。誰にも言わないで、って書いてあったんですけど言っちゃいました、ごめんなさい。

酒井田 内容は、

木内 内緒です、でも、もうここには帰ってこない方がいい、って。酒井田さんたちには来てないんですか、遺書。

酒井田 来てないけど、亡くなったのは、ご両親から。

木内 じゃあ今日は、みんな知らないふりしてたんですね、

板野 それは、ご両親から内密にして欲しいって、

木内 そりゃ内密にして欲しいですよ、結婚まであともうすぐってところで自殺なんて、絶対なにかおかしいですもん、ね？

板野 ……。

お二人とも、どうぞおしあわせに。

実莉ちゃん、

大丈夫ですよ、誰にも言いませんから。

板野 ……。

木内 だからお二人はどうぞ、絵未子さんがいたこの町で、絶対にしあわせになつて下さい。わたしはこの絵と一緒に東京へ帰ります、いままでありがとうございます。

木内、玄関へ小走り去っていく。

板野、木内を追いかけていく。

それをただ眺めることしかできない酒井田。

絵未子、おもむろに左手の薬指の指輪を外し、ゴミ箱へ捨て、部屋を去る。

酒井田、その音に気づき、ゴミ箱を覗き込む。恐る恐るゴミ箱の中へと手を伸ばし、絵未子の指輪を手取る。

板野、早足で部屋へと戻ってくる。

酒井田、板野へ絵未子の指輪を見せる。

板野、酒井田の手のひらの上の指輪を覗き込む。

かつてのしあわせの証だけが、錆びもせず、ただそこにある。

無断複製・転写を禁じます。

作品に関するお問い合わせ、上演許可等につきましては、カミグセ
(info@kamiguse.com)までお問い合わせください。